

読書感想文

「キリスト者の標準」 ウォッチマン・ニー

以下の感想文は、関西聖書学院2年のとき、組織神学担当の安黒先生よりの宿題に提出したものである。学びの中で、多くのことを教えられたが、現在2010年、いまだ本来の信教の自由を得ていない、共産党支配下の中国において、地下の教会ともいうべき、「家の教会」に集う人たちが、7千万人とも1億人ともいわれている。この中国における野火のような燃え広がる信仰覚醒へ、本書が火種になったひとつであろうことは、容易に予想されるのである。

関西聖書学院

2年 奥田 昭

ウオッチマン・ニー師（以下ニー師という）は20世紀、神に大いに用いられた器である。1903年中国で生まれ、17才で救われ、18才で聖霊のバプテスマを受け、19才から教会設立のために伝道宣教に召されている。師は1952年、イエス・キリストの故に当時の中国共産党政権の下に逮捕投獄された。一度15年の刑期を終えたが、権力者による信仰の放棄の迫りに屈せず、再度投獄強制収容所に投獄されることになる。それから5年後の1972年、69才で監獄の中で天に召された。師は殉教者である。同時に中国いや全世界の福音化のために、自分を徹底して、主にささげた神のしもべである。

ニー師は穏健カルヴァン主義神学の影響下にあるブラザレンの流れで救われたといわれているが、内的葛藤にあるときにケズックの流れの宣教師に会い危機的聖化を学び経験し、危機的聖化と漸進的聖化の折衷的理解をもつようになったともいわれている。ホーリネスの危機的聖化、バプテストの漸進的聖化の折衷的理解者と言われている。

本書の基本的内容は、イエス・キリストによる罪からの解放であり、聖霊の導きにより、どのようにして神がご自身の子らを効果的な奉仕のために備えられるかである。そして、本書はニー師の十字架の徹底的理解の書である。新約「ローマ人への手紙」（以下ローマという）を基本テキスト、ベースとして神への全き献身のゴールに向かって信仰者の成長について著述されている。十字架の概念を徹頭徹尾中心に構成している。本書は組織神学の視点からいえば、救済論をベースに教会論の視点まで展開している。本書は義認と聖化のメッセージでもある。聖化の部分を徹底して献身、奉仕、宣教まで展開している。

本書は14章で構成されているが、最初第1章で義認について、以下、後の13章は基本に聖化を述べつつ、そして聖化プロセスについて進歩の行程として、すなわち、キリスト者の歩みとして5段階の分けている。具体的に（3章）知ること（4章）認めること（6章）自己を神にささげること（10章）御霊による歩み（13章）十字架を負うことである。標準的なキリスト者の条件としキリスト者の歩み、聖化の道筋とするのである。

義認とは「神がご自身の目から見て罪人たちを義と宣言する行為である。」（エリクソン著「キリスト教神学」4巻P131、以下「キリ神」という。なお、「キリスト教の神学」は関西聖書学院の組織神学に使用するテキストである。）又、聖化とは「信仰者の人生に働く神のわざであって、実際にその人を聖いものにするもので、特にイエ

ス・キリストによってなされたわざを聖霊が信仰者の人生に適用すること。」（「キリ神」P 146）とされている。したがって義認と聖化は不可分のものであり、一つのことの二面のものと言えるだろう。次に両者の対比であるが、義認は「即座に起こり、瞬時に完了するが、聖化は完成までに全生涯を要する過程であり、霊的生命の継続的成長である。義認は法廷行為または宣言行為であるが、聖化は人の性格と状態の実際の変化である。義認は神の前における立場、神との関係に影響を与える客観的なわざであるが、聖化は内なる人に影響を与える主観的なわざである。」（「キリ神」P 148）

義認が即座に起こり、瞬時に完了し、聖化は完成までに全生涯を要する過程であるとすなら、本書において、第1章に義認と説き、以下聖化について述べているのは理解できる。本書は「ローマ人への手紙」最初の8章、いわゆる神学部分ににつき、前半を1章から5章11節、後半を5章12節から8章39節として、義認と聖化に対応している。罪について、二つに分け、前半に単数形の罪、後半に複数形の罪が現れるとしている。次に神の救いについて、二つの面を提示し、単数形の罪のゆるし、複数形の罪からの解放ととらえる。ここに人間の罪の二重性と神の救いの二重性が重なり合うのである。罪のゆるしとしての、十字架の血、罪からの解放としての十字架によるキリストの死、埋葬、復活なのである。

1章「キリストの血」は、「神はキリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、・・・今の時にご自身の義をあらわすためであり、・・・エスを信じる者を義とお認めになる」（ローマ3：25～26）のであり、「今すでにキリストの血によって義と認められた私たち」（ローマ5：9）の十字架による罪のゆるし、義認について述べている。2章「キリストの十字架」では「ひとりの人の不従順によって多くの人が罪人とされたのと同様に、ひとりの従順によって多くの人が義人とされる」（ローマ5：19）として、聖化の立場を明らかにするのである。すなわち、十字架は、私たちをアダムからキリストへと移す神の力である、としている。3章「知ること」は、みことばの啓示をとおして知ること、で、「私たち古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。」（ローマ6：6）神の啓示によって真の知識を得るのである。

4章「認めること」は、その意味合いを認識するで、「あなたがたも自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。」（ローマ6：11）十字架により死に十字架により生きたのである。それを信仰によって認めることが説かれている。

6章「自己を神にささげる」ことは、その認識を基盤として自分自身を捧げる、献身についてであるが、「あなたがた自身をその手足を義の器として神にささげなさい」（ロ

ローマ 6 : 13) 主のために聖別される、自己を完全にキリストにささげること、それがホーリネスだとするのである。10章「御霊による歩み」は、「いのちの御霊の原理が罪と死の原理から、あなたを解放したから」(ローマ 8 : 2)「肉に従って歩まず、御霊にしたがって歩む」(ローマ 8 : 4)ことを説かれるのである。

13章「十字架を負うこと」は、献身・奉仕において原理的・实际的に十字架を負うことについてである。「キリストが異邦人を従順にならせるため、この私を用いて成し遂げてくださったこと以外に、何かを話そうなどとはしません。キリストは、ことばと行いにより、また、しるしと不思議をなす力により、さらにまた、御霊の力によって、それを成し遂げてくださいました。」(ローマ 15 : 18~19)これが霊の奉仕なのであり献身なのである。

上記の標準的なキリスト者の条件とされる以外の箇所では、5章「十字架による区分」では、十字架によって造られた、新しい創造、新しい国、新しい世界について説いている。「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによってキリストとともに葬られた」(ローマ 6 : 4)埋葬は終末を意味し、そして、「もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活と同じようになるからです。」(ローマ 6 : 5)十字架によって新しい命へのよみがえりを得ることができるのである。7章「永遠の目的」神の創造と贖罪の目的はなんだろうか。それは「私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともにあかししてくださいます。もし、子どもであるなら、神の相続人であり、キリストとの相続人であります。」(ローマ 8 : 16~17)それは「御子が多く兄弟たちの中で長子とされるためです。」(ローマ 8 : 29)そして「神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にさらに栄光をお与えになりなした。」(ローマ 8 : 30)多くの栄光を与えられた子ども達のうちで長子とされることなのである。これは聖化の目標でもある。(「キリ神」P149)

8章「聖霊」についてはどうだろうか。「聖霊」を内的働き・聖化と外的働き・聖霊の満たしととらえている。(「キリ神」P149)ここでは、ヘンドリウス・ベルコフ著の「聖霊の教理」との対比すれば、まず二師は聖霊論の認識において、ベルコフ師の言を借りれば、非常に静的な把握をしておられるように思われる。カトリックは聖霊を制度化し、プロテスタントは聖霊を個人化した。両者に共通するのは、制度主義的並び個人主義的な内向性と利己主義とを育成する共犯者となっている。両者に共通するのは静的聖霊論であり、それは聖霊論の貧困であるとする。聖霊は一人の人から多くの人へ、キリストから世へと人々を推し動かしていく偉大は働き手または力になりず、実践的運動に目を向けねばならないとする。いわばダイナミック、動的な聖霊論の必要性である。

伝道の霊の働きがないなら、これらすべてのわざはけっして神の力あるわざとして知られることはなかったであろう。伝道のわざはそれに先立つ神の力あるわざの働く通路であって、このわざは今も進行中であり、この進行しつつある完成の証人がわれわれなのである。ベルコフ師は、伝道に参加しない静的クリスチャンは異端的あり、自己中心的と極論する。「聖書は召命の物語であって、回心の物語でない」とし、そして個人の救いがキリスト者の生活の目標となるなら、キリストはその目標への手段にすぎなくなり、キリスト者は単なる消費者となったしまうだろうと断言するからである。

9章「ローマ人への手紙7章の意味と価値」についてである。ローマ書6章では罪からの解放を、7章で律法からの解放である。「今は、私たちは自分を捕らえていた律法に対して死んだので、それから解放され、その結果、古い文字にはよらず、新しい御霊に仕えているのです」（ローマ7：6）十字架によって律法は終わったのである。11章「キリストにあって一つのからだ」では献身についてで、「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」（ローマ12：1）とすすめる。12章「十字架とわれらのいのち」も献身についてである。「自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできない。」（ルカ14：27）主から離れて何一つすることが出来ないのである。主から離れたものはすべて無である。14章「福音の目的」では十字架の影でおこったできごとを取り上げている。高価な油を主に注いだマリヤの話である。神への奉仕、献身として主にもっとも喜ばれることは、この世にあってムダに見えることのすすめである。

本書の構成はケズイック聖会の内容構成と類似していると言われている。あるいは、ケズイック運動のメッセージを整理したのもとも認識されている。内容構成が同聖会のプログラムと酷使しているからで、それ故に本書の資料源は同運動にあるとも、同聖会におけるローマ書の講解とも称されている所以なのである。そもそも、同聖会の内容構成は、第1日目「義認」第2日目「聖化」第3日目「献身」第4日目「御霊にある生活」第5日目「奉仕・宣教」となっているが、本書も第1章の義認論、第2章以下の聖化論、聖化のプロセスとしての幾つかの条件について、8章10章の聖霊論、11章から13章への献身論（奉仕論を含む）となっているかである。

ケズイック運動は歴史神学の視野から位置づけると、宗教改革とその神学的遺産を大成した正統主義神学の時代につづく敬虔主義運動にルーツをも持つものである。ケズイック運動は教会史において敬虔主義運動（正統的教理を生活実践に結びつける運動）の遺産を継承するものである。敬虔主義運動は、ルター派、改革派内における霊的刷新

運動、英国における宗教改革運動であるピューリタニズム、近代の福音的信仰覚醒運動、19世紀以降の聖霊派運動（ここにウオッチマン・ニーが入る）などがある。これらは敬虔主義運動の霊的遺産である。ウオッチマン・ニーの著作、ケズビック運動などは、広い意味で正統主義神学を生活化しようとした敬虔主義運動に包括できるのである。

したがって、本書は福音の最も根幹的部分とも言うべく、十字架について、幅広くかつ徹底的に掘り下げ述べながら、キリスト教史における敬虔主義、正統主義神学の流れを汲んだ偉大な書というべきであり、関西聖書学院KBI生の永遠の基本書と言うべきものである。